



社会医療法人近森会

発行

2013年2月25日

びろっば 3

Vol.320

www.chikamori.com

高知県高知市大川筋一丁目1-16 〒780-8522 tel. 088-822-5231 発行者 ● 近森正幸 / 事務局 ● 川添昇

朝のカンファレンス風景

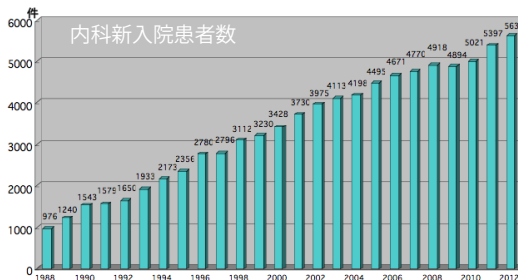


近森病院に着任以来25年（四半世紀）になりました。当初は内科医7人、病床数60床、年間新入院患者千人以下で、外科系救急病院のおまけの内科といった感じでしたが、その後川井和哉、山崎正博、栄枝弘司各主任部長はじめたくさんの医師が集まってくれ、現在は内科医35人、病床数200床、年間新入院患者5500人以上を診療しています。

私の専門である循環器内科や消化器内科、神経内科では高知県を代表するまでになりましたが、今でも内科は一つということで、病棟も医局も共有し、毎朝のミーティングや週1回の症例検討会などではできるだけ全員で集まり、垣根のない医療を心がけているのが特徴かと思っています。

1992年の新館オープン、2000年の心臓血管外科開設、2003年の地域医療支援病院認定、2010年の社会医

25年を振り返って

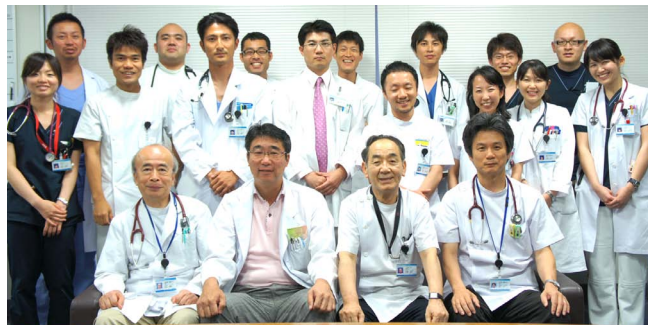


近森病院

副院長・内科部長 浜重 直久

療法人認定、2011年の救命救急センター認定などを経て、近森病院の医療も次第に社会的、公的に認知されるようになってきました。現在リニューアル5年計画の総仕上げである新本館の建設途中ですが、25年前の旧本館だけの時代を知る身にはずいぶん感慨深いものがあります。高知医大老年病科の助手でしかなかった私に、近森病院内科を託してくれた近森院長にたいへん感謝していますし、色々な形で支えていただいた多くの皆さんに心よりお礼を申し上げたいと思います。

「内科医は generalist であるべき」



というのが私の信念ですが、これからも専門バカにならず一内科医としても一社会人としても reasonable（妥当）と思われる医療を心がけ、患者さんと地域の先生方に信頼される近森病院であり続けたいと思っています。今後とも皆さんのご協力をよろしくお願いいたします。

はましげ なおひさ

浜重直久先生に、昭和63（1988）年3月1日、内科科長として近森病院に来ていただいたとき、医局から「ご迷惑をおかけするかも知れませんが、よろしくお願いします」というような意味のことをいわれたのを思い出す。

確かに、院長を院長とも思わない態度でさんざんにいわれたが、「患者さんのための医療をするんだ」という真摯な姿勢には感銘を受けた。浜重先生の医師としての矜持が窺える。出来高払いの時代に、「無駄のない医療をしないとイケない」と本来医師としてあるべき姿を常に示してくれた。そしてこの25年間、お互いに戦友のような気持ちで一緒に病院をやってきた。

患者さんを診て病名を絞り込むときも、大きく網をかけたその真ん中に

浜重先生と共に25年



近森 正幸

つも正解があった。浜重先生の内科医としての臨床力は、日本でも屈指ではないかと思っている。循環器内科や神経内科、消化器内科など、すばらしい先生方を選んでくれて、外科中心であった病院を内科中心の高度急性期病院に転換し、心臓カテーテル室や内視鏡

センターでの内科の手術を大きく伸ばしてくれた。さらに、内科医はスペシャリストである前にゼネラリストであるべきだという大きなポリシーのもと、大内科制を維持し、どんな患者さんであっても診られる総合医を育ててくれた。経験をつめば徐々に専門医を目指す。これはもっとも自然な内科医の育て方だといえる。

浜重直久という人を得て、自分はほんとうに幸せ者だと思う。医師として、人間としてどうあらねばならないかをいつも学ばせてもらった。彼が居てくれたから近森はいい病院になれたともいえる。お互い無理のできない身体になったが、これからもずっと近森を見守っていただきたい。

理事長・ちかもり まさゆき

近森会グループ「PSサポーター」の誕生

PS サポーター育成運営メンバー

総務課長 小松 左和

PS (Participant Satisfaction = 参加者満足) という言葉に、近森会グループの職員は聞き覚えのある方が多いと思います。入職時に研修を受けていますので、何となくイメージできるのではないのでしょうか。

期待に胸を膨らませて研修を受けた頃は、思いやりのある医療人になろう、礼節をもって応対しようと誰しもがそう思っていたはずですが、それが、日常の業務に追われるうちに、つついぞんざいな口調になってしまったりした経験はありませんか。仮に、これが近森会グループの風土になってしまうようでは困ります。

そこで、今回はPSの意味をしっかりと理解して根付かせるために、各部署より推薦されたメンバー16名を推進リーダーとして育成することになりました。新人の対応指導をはじめ、彼らの活動により他の職員が啓発され、より良い風土が醸成されることを期待

しての取り組みです。

2回の研修ではお辞儀の角度や電話応対など、基本的な動作や言葉遣いなど、お手本となれるように練習を繰り返しました。これが、頭では分かっているのに、いざ人前でやってみるとどこかなく、とても講師の江藤かをる先生(エデュネット協会)のようにスマートには行えません。自分はこんなこともできなかったのか。と脂汗と恥を大にかいたものです。

そして、3回目の研修は急遽、PS推進のための個人とグループの活動を

▼サポーター16名と運営メンバー3名で江藤かをる先生(中央)を囲んで。筆者は中段向かって左端

発表することになりました。この案内板は初めて来院される方にとっては分かり難いかもしれないのでこういう風に改善してはどうか。など、いままで気づかなかった事柄にはっとさせられるような発表が相次ぎ、聴講に参加した同僚や上司を大いに驚かせてくれました。

研修を終えて成長した彼らは近く「PSサポーター」という名称で、院内認定されます。今後も活動を継続していきますので、どうぞよろしくお願いします。

こまつ さわ



▲今年度新人のフォローアップ研修にも参加



3月の歳時記

おにたびらこ

近森リハビリテーション病院
4階東棟看護師長
岡本 真由美



道端でよく見かける野草です。名前を知り衝撃を受けました。「おにたびらこ」だそうです。長い茎にタンポポを地味に小さくしたような薄黄の小さな花をつけ、花が終わると綿毛ができます。1cmにも満たない小さな花ですが、よく見るとかわいらしくてほっとなごみます。花言葉は「純愛」「想い」「仲間と一緒に」などです。

おかもと まゆみ



絵・総務課
広報担当
公文幸子

皆さんはどんな形であれ趣味をお持ちだと思いますがどのようなものでしょうか。

小中学生のころは切手集めなどされた方も多いのではありませんか。あるいは有名人が趣味を問われてゴルフや読書などをあげる人も多いようです。多忙な勉強や仕事のなかで、息抜きの一服の清涼剤になるような位置づけかも知れません。

一昨年ノーベル化学賞を受賞した根岸英一先生は“私の履歴書”のなかで、幸福な人生を送れる四つの条件として、①家庭、②健康、③プロフェッショナルな仕事、に加え④趣味(Hobby)をあげており、趣味は豊かな人生を送るための重要な要素と位置づけています。

——私の流儀—— 5

趣味について



近森病院神経内科
主任部長

やまさき まさひろ
山崎 正博

私自身、切手蒐集から始まっているいろいろな趣味を持ちました。大学時代は写真部でフィルム現像からプリントまで、たいへん手間がかかりましたが現像液から浮かび上がる印画紙像に一喜一憂したものです。とき

どき現像しますが、シャッターを押すだけで簡単に写真ができるデジカメ世代にはその手間は想像できないでしょう。

私自身、趣味はそれを通して自分を創り、世界に眼を啓かせ、人間の営みを知るもの、と考えています。受け身ではなく能動的なものです。学業優先で趣味にいい顔をしない母親が増えているようです。どなたかが書いていましたね、子供時代に熱中するものを持った人間は学業や仕事も熱心だ、と。もう一度趣味について考えてみませんか。

回復期リハ看護師の活動報告 ～現場とのコラボレーション～

近森リハビリテーション病院
看護部長 寺山 みのり



一般社団法人回復期リハ病棟協会認定の“回復期リハ看護師”は、現在548名で、6期生120名が受講中です。認定コースは、18日間の研修と、その後4か月以上の実践レポートで修了します。

当院の認定者は私を含めて、シニア看護師長、看護師長、主任、リーダーたちの8名で、各々が地域連携や、摂食嚥下・排泄・記録・教育などの委員会で活動をしています。そして、私たちは、認定コースの学びをもとに、同じ意識をもつチームとしても活動をし

ています。

そのひとつが、当院の新人看護師を対象とした研修会の運営です。今年度は、新人看護師が患者さんを担当するまでに身につけておきたい「摂食嚥下障害をもつ患者さんの看護」、「高次脳機能障害をもつ患者さんの看護」、「回復期リハ病棟での看護過程の展開」などの講義、演習を半日コースで行いました。

また今年度は、看護部では回復期リ

ハ病棟の課題である「看護、介護の協働のあり方」を見直し、業務方法を変更しました。その過程や実践6カ月後のスタッフの意識調査にも認定者が関わりました。そして、認定者と介護福祉士主任の二組が全国や地方の研修会で、看護、介護の協働をテーマに講演する機会もいただき、当院の現状と課題を整理することができました。

このように私たち回復期リハ看護師の活動は、教育委員会や主任会、そして現場のスタッフの皆さんとのコラボレーションで成り立っています。新人看護師も患者さんを担当してからは、日々の実践を通じた教育が中心です。先輩が質の高い看護実践の手本となり、後輩の指導や相談にのれるように、現場に「回復期リハ看護師」を増やしたい！と思っています。

てらやま みのり

メディカルスタッフ・ワークウェア9

モデル・村岡明美医師（左）、岡田光生医師

消化器内科は、院内でワークウェアへ変更する動きが出始めた2010年ごろにウェアを変更した。カラーはERや整形がブルー系統だったので、多数決を取り黒とした。当初珍しい黒色は、「忍者」と冷やかされたりしたが、今ではすっかり消化器内科のカラーとして定着している。

内科系救急疾患も多く、患者さんの負担を短時間に軽減することが求められる彼らは、冷静な判断、迅速かつ的確な診断はもとより、周囲への指示、調整役も担う縁の下を持ちでもある。他部署への気配りもかかず、チーム医療の一員として常に最善の医療を提供できるよう、日々専心努力している。



お弁当拝見 12



感謝！ 家庭菜園弁当

近森病院 第二分院 4階
ストレスケア病棟看護師

西村 節子



社会人になった息子から「残り物でいいから、お弁当作って」と注文があつて以来、私も息子に付き合ってお弁当を持って来ています。

数年前に主人と始めた家庭菜園がやっとならなくなって、いろいろな野菜も作れるようになり、今では家族のお弁当に彩りを添えてくれています。田舎料理が主で

凝ったものは作れないですが結構満足しています。

今日の献立には、菜園で獲れた茎ブロッコリー、里芋、ネギ、生姜、大根が入っています。茎ブロッコリーと竹輪のお浸し、里芋の煮付け、豚肉の生姜焼き、生姜のふりかけ、大根の漬物物などです。ネギ入



り卵焼きは定番の一品です。（アクセントにプチトマトを入れました）デザートは自家製の干し柿です。

最近では梅の紫蘇漬けや、酢大根のお漬物物にも挑戦し病棟スタッフの「おいしい！」という笑顔を見るのが楽しみのひとつになっています。 にしむら せつこ

KOCHI FES 第2回コーチフェス開催

近森病院初期研修医1年目 衣笠 由祐

2月16日(土)、第2回コーチフェスがコーチレジ(高知県で初期臨床研修を行っている研修医の総称)主催、高知県臨床研修連絡協議会、高知医療再生機構の共催で、研修医や医学生のための勉強会として企画、開催されました。近森病院管理棟3階フロアで、全体で114名の医療関係者(医学生55名、研修医38名、医師等21名)の参加がありました。

今年は、医学生低学年向けブースで腹

腔鏡などの体験や、高学年向けブースでは、国試に合格した人に話をさせていただくだけでなく、失敗した人に「なぜ落ちたのか?」ずばり聞いて、国試対策しようという斬新な企画などもありました。また、尾崎正直高知県知事が見学に来られ、研修医ブースの聴講や手技を体験されたり、またメイン会場では激励の言葉もいただきました。

参加した医学生、研修医、医師が一つとなり、高知の医療を盛り上げるために自分には何ができるのか、みんなが何かを感じた1日だったのではないのでしょうか。

きぬがさ ゆうすけ



職員旅行

スペイン2班は、マドリッドとバルセロナの2都市をまわり、ガウディの建造物や、本場のフラメンコなどを堪能しました。



ワイン講座 ● 9

スペインのワイン

スペインは、フランスとイタリアに次ぐ世界第三位のワイン生産国です。ぶどう畑の面積は世界一位。と聞けば、大量消費型のワインがその殆どと想像しがちだが、中身は、多種多様なワインが生産されています。

まず、カヴァと呼ばれるスパークリングワイン。シャンパーニュと同じ製法で造られながら、リーズナブルな価格で味わえる事から、支持層を着実に増やしています。

また、スペインで良く知られているのは、酒精強化(アルコール醗酵中又は、醗酵終了後に、ブランデーなどを添加したもの)されたシェリー酒。こ

ペタロス/生産者デスセンディエンテス・デ・ホセ・パラシオス/生産地スペイン、ピエルス/ぶどう品種メンシア●樹齢60年を上回るぶどうで造られています。フレッシュな果実の風味、滑らかで深い味わい。ヴァン・ナチュールの生産者によるもの。

ちらは、白ワインのようなキリッとした辛口のフィノ・タイプから、極甘口のデザート・タイプのものまで。

最後に、最も特徴的なのが、樹齢の高いぶどうの古木(ヴィエイユ・ヴィーニユ)が、多く存在し、人間に例えるなら、50歳ぐらいの経験豊かな樹々が、いい仕事をしてれています。量より質への転換。スペインでもその風は吹いています。

鬼田知明(有限会社鬼田酒店代表)



管理部長の こだわりヘルシー美食 32

近森会管理部長 川添 昇

寒い冬は暖かい部屋で寛ぐのがいいが、そんな季節でも相変わらず夜空をウロウロする日もやめてはいない。

居酒屋の入口を開けるととたんに眼鏡は暖気で曇り、その先のカウンターの楽しそうな同輩の姿が見える。

でも今夜は家飲みで「かぶのスープ」を作ってみた。



画・総務課広報担当 公文幸子

●材料

- ①かぶ 2個
- ②ローリエ 1枚
- ③バター 5gからお好みで
- ④固形スープの素 1/2個
- ⑤牛乳 1カップ
(生クリームを少し入れるとコクが出る)
- ⑥みそ 小さじ1弱
- ⑦かぶの葉 1個分

●作り方

- ・⑦を1センチ位に切っておく。
- ・①を皮をむき半分に切り、鍋に切り口を下にして並べ、水カップ1、②、③、④、塩少々を入れ弱めの中火でかぶが柔らかくなるまで20～30分煮る。
- ・柔らかくなれば一旦火を止めて粗くつぶす。
- ・再び火にかけ⑤⑥⑦を加えてゆっくり温めて
- ・粗挽き黒胡椒をかけて出来上がり

●食す

メインの若鶏の足などを白ワインで食した後、あたたかいかぶのスープに移る。ウームなんと胃に優しいことか。

ふだんの暴飲暴食を一気に反省し、かぶのように素直な食生活を取り戻そうと殊勝に考えさせてくれる。

かぶの残りの葉と茎で作った美味しいふりかけを熱ごはんに乗せ、冷たい吟醸酒でジワジワ締めるとなると先ほどの反省はいったい何だったろうか…。

MRI 装置（前編）

近森病院画像診断部診療放射線技師
主任 島崎 悟



MRI と聞いて知らない人はほとんどいないほど、医療画像診断装置として

ハッスル研修医

多くの方々と出会い



研修医 重清 知子

友達や家族のサポートがあり、国試を無事に終え、先生方や同期、たくさんのスタッフの方々に支えられ、近森病院のなかでの研修が始まり、1年が経とうとしています。

私の趣味の一つに、ダイビングがあります。ダイビングでは、たくさんの人との出会いがあり、経験が増えるにつれ視野が少しずつ広がり、新しい景色が見え、楽しみも増えていきます。医師の仕事も似ていて、仕事をし始め、たくさんの職種の方々と出会い刺激を感じ、仕事に少しずつ慣れることで自分の未熟さを感じながらも、勉強したいこと、挑戦したいことが増えてきました。

今年は、外にも視野を広げ、高知県の災害医療等について講演会等にも参加し、積極的に学ぶことが目標です。今月で東日本大震災から2年。医師の義務とは何か、研修医の自分にできることから考えていきたいと思っています。そして今年もよさこい等、近森の楽しいイベントにも参加し、近森での研修を楽しもうと思っていますので今後もよろしくお願いします。

しげきよ ともこ

の地位を確立していますが、国内最初のMRI装置が慈恵医大病院に設置されたのが1983年とまだ歴史の浅い医療機器です。

近森病院に初めてMRIが設置されたのはバブル崩壊後の1992年12月、GE横河メディカルシステム社の0.5テスラMRIでした。

MRI検査について簡単に説明すると、磁気共鳴画像検査とも呼ばれ、人体に対し強力な磁場と電磁波を加えることにより体内のプロトン（水素原子核）を利用して、体の断面を撮影する検査です。

当時、造影剤なしで脊髄や脳血管の情報が得られ、たいへん画期的な検査でした。しかし今ほど画像処理ソフトや高速撮影の技術が発達しておらず、磁場強度も低かったため、MRIのお家芸ともいえる頭部MRA検査は全撮影件数の約4%ほどでした。現在は約45%になっています。

今回は現在稼働している1.5テスラMRIの最新情報をお届けします。

しまさき さとる

院外エッセイ

想像すること

釣井 龍秀

四国曼荼羅霊場 61番 粟生聖天 定福寺 副住職
定福寺豊永郷民俗資料館 学芸員

昭和48年7月生まれ、高知市出身。大学は工学部卒業後、システムエンジニアを経て、現在大豊町豊永郷の定福寺で修行中。趣味は漫画、映画、音楽、観劇、登山、スポーツ etc. とくに宮崎駿とガンダム好き。



人類だけが獲得したものが想像力であり、そこから芸術と宗教が誕生したとおっしゃられる先生がいます。皆さんは毎日何か想像していますか。

私の母校の土佐塾高校には当時校則がありませんでした。それを聞くと自由だ、と思いましたが、いつ頃からかこれでいいのか、と些細なことから自問自答が始まり、様々な物事について思考し想像することを始めました。校則は時に思考や想像することを奪う側面も持っていることに気づかされます。

想像の延長上にあるものが物語や神話ではないのでしょうか。日本には素晴らしい物語があります。河合隼雄先生もおっしゃられるように古代よりモノを語るということは重要なことと考えられてきました。

ネイティブアメリカンをはじめ世界中で古代の人々は物語のなかに大事なエッセンスを閉じ込め語り継いできました。どうやら物語は時間と空間を超えて様々なものをつなげる役割もあるようです。物語を改めて読み返すと多くのことに気づかされ、古代の人々の智慧に頭が下がります。

例えば「鶴の恩返し」は禁忌を破つ

た家族に対して鶴は仕返しをせず、寂しそうに去っていきます。罰を与えないのです。同じような物語はケルト文化にもあります。罪と罰の意識が蔓延する現社会で、どのようにこれを想像するのでしょうか。

仏教はお釈迦さん以来2500年以上、心を見続けてきた宗教です。その仏教は「他を想像する」「他を思う」ということを出発点にした教えです。悪口を言われる側の立場や殺される側の立場を想像すればできないでしょう、と仏陀は教えます。日本人は人に対しても自然に対しても平等に想像をしてきました。また物語がつながろうとするように想像力はあらゆるものを結び付けようとする力を持っています。

今、想像力を持ちつなげようとするのがとても大切なときではないかと思います。「弱い者いじめは絶対許さない」と言い続けた父高橋豊栄は多くの方々に支えられながらその想像力を障害を持つ人々に向けました。私も私なりの想像力を持ち常に高くて固い壁にぶつかり壊れる卵側の立場でありたいと思います。

つるい りゅうしゅう

よさこいチーム「ちかもり」2013 年始動します！

土佐おもてなし勤王党と一緒に

よさこい実行委員会代表
企画課課長代理 奥田 興司



フラフもまといも
頑張りました

ちかもりのよさこいチームは、今年で4年目になります。これも偏に皆様方のご協力の上実現できており、たいへんありがとうございます。

さて、2013年のボーカル募集を始めました。徐々にではありますがよさ

こいに向けて準備を開始しております。また、地元へのアピールも兼ねまして、昨年12月1日と今年の1月19日に近森病院のお膝元である、高知駅前「こうち旅広場」にてよさこいの演舞を行いました。当日はたいへん

寒いなかでしたが、多くの観客の前で演舞ができ喜んでいただけたと思います。

今後も、地元高知を盛り上げるべく色々なイベントに参加する予定です。ぜひ、今年のよさこいも大いに盛り上げますので参加したいな！と思う方はお声をお掛けください。

おくだ こうじ

近森会 保育室 そろと

2月1日（金）に、「そろと」に赤鬼さんと、青鬼さんがやってきましたみんな逃げたり、泣いたり、こわごわ近寄ったり……。

豆をぶつけて、無病息災、邪気払いで今年も元気にすごそうね！



私の趣味

お菓子作り



近森病院 5B 病棟
看護師
高橋 幸子



私の趣味は「お菓子作り」です。お菓子作りといっても、凝ったお菓子ではなく混ぜて焼くだけの簡単なお菓子がほとんどです！ 材料も家にあるものを使って作ることが多いです。

気軽に作ることができるお菓子作りは趣味でありながら、私にとってはストレス解消法の一つでもあります。仕事で疲れていても夜な夜なお菓子を焼いてしまうほどです。そして、こんなに適当に作ったお菓子を友達にプレゼントします。適当に作ったものをプレゼントするなんて失礼ですが、喜んでくれたら嬉しくて、調子にのってどんどんお菓子を焼いてしまいます。

お菓子作りをしていちばん嬉しいのは、作ったお菓子を美味いって食べてもらえることです。これからも、みんなに美味いって言ってもらえるお菓子をたくさん作りたいと思います。

たかはし さちこ

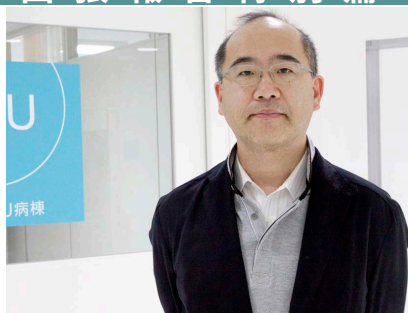
お知らせ 医療従事者対象

◆高知中央医療圏脳卒中地域連携の会
第22回合同会合（2012年度第5回）
日時：平成25年3月17日（月）
10:00～12:00
会場：高知医療センター2階
くろしおホール
内容：
第一部「2012年度脳卒中地域連

携パス使用実績報告」

発表 高知中央医療圏脳卒中
地域連携の会事務局 高橋潔
第二部「医療機関と在宅・施設を
結ぶ医療・介護地域連携パス
～香川シームレスケア研究会の
活動を通して～」
講師 綾川町国民健康保険
陶病院院長 大原昌樹先生

出張報告特別篇

近森病院での
見学を終えて岐阜ハートセンター心臓血管外科
部長 富田 伸司

日本の10年先の高齢化社会が今の高知にあり、そのなかで精力的に対応しているということ、心臓外科入江先生から伺いました。特にチーム医療のシステムと心臓リハビリテーションを中心に見学させていただきました。

みなさまがきらきらと輝いて仕事をしていることに感動しました。各部署が何をすべきを明らかにして自立的に動いているように感じました。

各所は機能しているようでも、規模が大きくなるにつれて、とすると一体感のないばらばらな状態になり、実態のつかめない存在になりがちです。しかし、近森病院は外部から見て一生命体が動いているような感覚でした。各部署のトップ、最後の要の院長先生の強いリーダーシップがあるからこそと感じました。

チーム医療とは？という問いに対して、入江先生は権限の移譲、院長は自立、自働とおっしゃいました。決してトップダウンのみの形態ではなく、各部署への仕事の移譲からやりがいを引き出しているように感じました。同時に、各人一院長先生の相互方向への情報共有の賜物と推察いたします。

心臓リハビリは、循環器、心臓外科関係でおよそ80ベッドに対して22人の心臓リハビリチームが関わっているとは驚嘆です。しかし、今では22人の大人数ですが十数年前はたった2人から始めたと同いました。

岐阜に帰り、早速、83歳（CABG1日後）歩行器を用いて200m歩きました。足の裏に地面を感じて立つ、そして歩くことが、短時間でもその後のリハビリに大きな自信になっていることを感じました。我々もまずははじめの一歩から、事故のないように少しずつリハビリを根付かせていきたいと考えています。

最後に、お忙しい業務のなかで、貴

重な時間をさいて快く見学を受け入れていただき、誠にありがとうございます



近森にて心臓リハビリテーションの体験を

した。入江先生、近森院長、各部署の方々に深謝申し上げます。

とみた しんじ

岐阜に戻り、早速実践を

寄り添う看護を
学ぶ研修に

医療法人須崎会高陵病院看護師

松本 真由美



2カ月の予定で近森リハビリテーション病院と近森病院で研修をさせていただきます。高陵病院で14年間勤務していた私は、「寄り添う看護」ができていたつもりでした。しかし、自分の看護は患者さんに寄り添っているのではないのではと、「寄り添う看護」のほんとうの意味がわからなくなっていました。

今回、近森リハビリテーション病院で研修をさせていただくことで、患者さんやそのご家族に対して、自分がいかに寄り添うことができているかを痛感することができました。近森リハビリテーション病院のスタッフは検温時に患者さんの近くに座り、ゆっくりと傾聴しているスタッフばかりで、誰もが声をかけていました。そして、高次脳機能障害の方が落ち着いて過ごせるよう、一人ひとりの特徴を把握し、かかわっていました。そして、

日々さまざまな場所で多職種が患者さんについて話しており、いかに患者さんに寄り添っているかを垣間見ることができました。

近森病院での研修はまだ2週間ですが、チーム医療のなんたるかを学ぶこともできました。接遇などの研修会にも参加させていただき、近森リハビリテーション病院のスタッフの個々の能力の高さに驚かされる日々を過ごし、一方で自分の能力の低さに愕然としたことでした。

病床稼働率の高さにも驚きました。そして、忙しい業務のなかでも「この人たちはみんな優しいよ」と、患者さんが笑顔で話していたのは印象的でした。私自身、まだ余裕がないのですが、いままで学んできたことを活かせるよう、残りの研修を頑張りたいと思っています。

まつもと まゆみ

乞！熱烈応援

動きがスムーズになるよう

高知ハビリテーリングセンター
自立訓練部主任 石丸 辰也



昨年の6月から自立訓練部の主任をさせていただいています。主任ということで自立訓練部内の動きのみではなく、ハビリテーリングセンター全体を見ながら動くことが出来、施設全体としての動きがスムーズになるように心掛けています。これから少しでも地域でその人らしい生活が出来る支援を行い、利用者さんやハビリにつないでいただいた病院関係の方に、ハビリを利用して良かったと思っていただけるように頑張っていきたいと思います。

いしまる たつや

利用者様と共に前進を

高知ハビリテーリングセンター
就労支援部主任 黒岩 真悟



早いもので、近森会では十数年が経過し、障害の分野で業務に携わらせていただき3年目となります。様々な障害を呈した利用者の方々が作業を通じて就労等に関する能力を獲得していただくとともに、自分の力で頑張る手にした工賃も含めての「自立と自律」に向い、胸を張って社会に出て行かれるよう支援させていただいています。「頼まれごととは試されごと」をモットーに利用者の方々と共に前進していきたいと思っています。

くろいわ しんご

可能性を引き出して

高知ハビリテーリングセンター
居宅部主任 切詰 文康



主任心得になった時は、生活支援部でしたが、今回は居宅部へ移動してから主任となりました。

ハビリテーリングセンターは通過型の施設であり特に居宅部（ハビリホーム）は、地域に近い部署でもあります。今後は年齢の若い利用者も増えてきます。他の部署とも連携を取りながら、少しでも可能性を引き出し、地域へ送り出せるように支援していき、主任としての役割を果たせるよう努力していきたいと思っています。

きりづめ ゆきやす

力を合わせて

高知ハビリテーリングセンター
生活支援部主任 弘田 精二



平成25年2月1日付けで生活支援部主任の辞令を受けました。まだまだ未熟な自分にとっては、気の引き締まる思いでいっぱいです。当センターは地域での生活や就業のためのトレーニングセンターです。三障害を対象としており、利用者さんの障害特性や生活歴も様々です。まだまだ支援をしていくうえで手探りの部分も多々ありますがスタッフと力を合わせ利用者さんが自立し地域での生活や就業が出来るよう頑張ります。

ひろた せいじ

気持ちを新たに

高知ハビリテーリングセンター
相談支援部ソーシャルワーカー主任
久武 稔幸



2月1日付で、主任心得の辞令を頂きました。入職して3年目、まだまだ周囲の皆様にご迷惑をおかけすることもあります。新年度からは放課後等デイサービス、特定・障害児・一般相談支援事業所が新設され障害児支援も始まります。他職種、地域との連携はもとより、今以上に相談支援部が一丸となり、チームとして力を発揮していけるよう、またより良い支援を提供させて頂けるよう精進していきたいと思います。よろしくお願い致します。

ひさたけ としゆき

新天地

高知ハビリテーリングセンター
管理部主任 永野 剛



2月16日付けで、高知ハビリテーリングセンター管理部主任の辞令をいただきました。

障害者福祉サービスセンターウェブでは就労支援へ4年間関わらせていただきましたが、高知ハビリテーリングセンターでの業務は、施設用度など新しい分野となり、主任として成長していくためにも良い機会であると考えています。また新たな気持ちで頑張りますので、今後ともご指導のほどよろしくお願い致します。

ながの つよし

日々、努力

近森リハビリテーション病院
理学療法科主任 門田 千穂



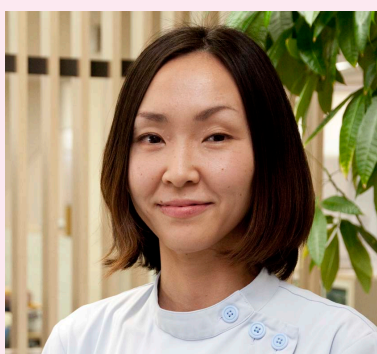
これまで、学生時代の長期実習、就職してからはリハ病院、本館、在総、訪問リハ、そして、出向先の吉村神経内科リハクリニック、高知ハビリテーションセンターで、近森会では様々な場所で多くの方々に会うことができ、本当に有難く思っています。

これから、いろいろな担うべき役割や多くの課題があるかと思いますが、一つずつ確実にこなして行ける様、日々、がんばって行きたいと思います。

かどた ちほ

気を引き締めて

近森リハビリテーション病院
理学療法科主任 片岡 千春



入社してもうすぐ11年になります。急性期から始まり、回復期、訪問リハなど、これまでにいろいろな場所で多くの経験を積ませて頂きました。こうして仕事を続けてこられたのも、先輩方の温かいご指導や周りの多くのスタッフの方々の支えがあったからこそと感謝しています。

まだまだ未熟な私に務まるのか正直不安です。自分自身が成長し少しでも周りのスタッフの力になれるよう、気を引き締めて頑張っていきたいと思います。よろしくお願いします。

かたおか ちはる

お知らせ 医療従事者対象

◆近森会健康保険組合第2回講演会
「新型うつ・若天性うつサインを
感じたそのときあなたはー」
日時：平成25年3月11日(月)
18:00～
会場：管理棟3階会議室
講師：近森病院第二分院副院長
宮崎洋一先生

◆第28回クリニカルパス大会
「消化器内科 ERCP」
日時：平成25年3月19日(火)
18:00～19:30
会場：管理棟3階会議室2
発表：医師、看護師、薬剤師、
管理栄養士、医事課、
システム管理室 (予定)

◆日本笑い学会四国支部第47回研究会
「笑って心も身体も活生き元気に！
～落語を聴いて笑って楽々健康術～」
日時：平成25年3月20日(水・祝日)
14:00～16:00
会場：管理棟3階会議室
出演：日本笑い学会四国支部代表
豊岡台病院院長
枝廣篤昌先生(芸乃虎や志)
落語協会 古今亭菊志ん さん

みんなの力で大きな一歩

障害者福祉サービスセンター
ウェブ支援員主任
藤田 杏侑美



ウェブで障害者の就労支援に関わって4年が経ちました。振り返ってみると日々作業に追われながら利用者の就労支援を行ってきたように思います。

就労継続支援B型事業所は障害者自立支援法の施行により大きく変化し、私たちはこの発展途上の分野のなかで日々「何かをしなければならぬ」と思いながら働いています。これからももっとも利用者働きがいを感じて活き活きと仕事ができるようアイデアを出しながら、職場みんなの力で大きな一歩を踏み出せるようにしたいと思っています。

ふじた あゆみ

リレーエッセイ

新しい環境

診療支援部
システム管理室
松本 和之



昨年の春に一戸建てを購入しました。周りに家がほとんどない田んぼの土地にあります。田舎の土地なのである程度の広さの庭も確保でき、家庭菜園や花壇がつけられるようになりました。

アパート暮らしの時は「もっとベランダや庭が広く日当たりの良い場所で家庭菜園をやったり、庭でゆったりしてみたい」という思いがあり、それが実現でき満足しています。

妻は花をよく植えては写真を撮るようになったし、2歳の娘は家のすぐ前に住む私の祖母といつも畑で遊んだり元気な田舎の子供になりつつあります。環境が変わったことで子供の性格や行動に良い影響を与えているのでしょう。

花壇のお花に水をあげているすみれちゃん



こういった環境で子育てをしたり、家の手入れなんかをしたりと仕事以外の時間も有意義に使えたらと思っています。

できたら、数年前まで学生時代の友人たちとやっていた軟式野球を再開できたらと思っているのですが、周りもほとんどが子育て世代なのであと数年はできないでしょうね。

まつもと かずゆき

Karibu Tanzania!

INDEX

今月の一枚	キリマンジャロ山
理学療法科チーム	ドドマ州立病院の今後の動向
タンザニアで出会った人々	今月のスワヒリ語 ～相槌～ NINAFIKIRI HIVYO ～帰国して思うこと～

今月の一枚：理学療法科チーム



2年間のボランティア活動を終えて2013年1月4日に帰国しました。理学療法士の村上野志夫です。「Karibu Tanzania」も今回で最後となりました。今月の一枚は、ドドマ州立病院の理学療法科チームで撮った一枚です。

タンザニアでの2年間は色々なことがありました。同僚のリハビリ中に泣き叫ぶ子供を見て、日本の理学療法とのあまりの違いにいたたまれなくなったこと。給料未払いで仕事のモチベーションが上がらないムタローに同情しながらも、もっと働いてほしくてケンカをしたこと。受付業務の運営方針で考え方の違いからカシムと言い争ったこと。病院のストライキで同僚が出勤せず、一人で患者さんの対応をしたこと。活動最後の12月、カシムとムタローが3週間不在でマダハと二人で頑張ったこと。苦労をしたことはたくさんあるものの、この2年間はとても充実していました。ラジオ体操を一生懸命覚えてくれたアシスタント看護師のマダハ。いつも無口で黙々と仕事しながらも、何かと私を家に呼んで話を聞いてくれ、支えてくれたムタロー。抜群の存在感でタンザニア式理学療法初心者私をサポートし、温かく見守ってくれたカシム。人柄の良いメンバーで、長期入院の患者さんが退院する時、皆で喜び、全員が涙目で送り出したこともあります。任期の終盤には「Tuko Team! (We are Team!)」と言ってくれました。彼らは最高のチームメイトです。Asanteni sana! (本当にありがとう!)

タンザニアで出会った人々

様々な人々と出会いました。皆さんのイメージされるタンザニアは、危険、貧困、動物、陽気な人々、いろいろあると思います。私が見てきたのは、日本と違う環境で普通に暮らす人々の生活でした。出会った人々たちについて少し紹介をします。



Nusura 一家

・NUSURA

Nusuraは24歳の女の子。2年前の転落事故で脊髄損傷となり、歩くことができません。私が初めて出会ったのは2011年の4月のこと。他病院から転院をしてきて、その後しばらくドドマ州

発行者 村上野志夫 (青年海外協力隊 平成22年度3次隊 理学療法士)
yashio310@gmail.com

立病院に入院し、リハビリをしていました。退院後も定期的にリハビリに通い、車いすで移動ができるまでになり、しばらくして彼女はリハビリに通うことを止めました。希望を捨ててしまったのか、もしくはお金がなかったのかもしれません。というのも病院までのタクシー代や理学療法代を払い続けることは生活を圧迫するからです。その後活動をする中で、彼女の生活が気になった私は、半年後に彼女の家を訪ねました。屋内での生活は自立し、家事などは自分で行えるようになっていましたが、ほとんど家の中に引きこもりの状態でした。家の周りの道路は未舗装路で、車いすで自由に出ていくことはできません。家族もNusura自身も今後どうしたらいいのか分からない……。という状態でした。でもやっぱり何かしたいとの希望が聞かれたため、障害者支援のNGOと一緒に訪問しました。その後、彼女は脊髄損傷の人々やNGOスタッフとの繋がりができ、少しずつ外に出ることが増えてきています。

・Mama Wiliam

Mama WiliamはWiliamという1才3カ月の脳性麻痺児のお母さんです。彼女は子供をあやすのがとても上手です。いつも素晴らしい歌声と笑顔でWiliamに愛情を注いでいます。家からバス停までは歩いて約30分。バス停から病院まではバスで約30分です。家には電気もガスも水道もありません。旦那さんはドドマから遠く離れた町で学校の先生をしており、Mama Wiliamは上の子供(7歳)とWiliam、そして夫の祖母との4人で暮らしています。タンザニアで子供(5歳未満)のリハビリは無料ですが、往復のバス代はかかるし、家での家事もたくさんあります。普段は畑仕事をし、内職ではミシンを踏んで生計を立てています。週に1回のリハビリでも、負担は小さくありません。しかし、彼女はいつも子供のことを想い、一生懸命頑張っています。リハビリに来るママ達は皆一生懸命に子供のことを想って頑張っています。そんなママ達の頑張りに、いつも励まされていたのは、私自身でした。

・Leah & Saidy & Helena

Leahは私の家の隣に住む看護師さん。私の母親のような存在でした。彼女は2人の子供たちと一緒に暮らしています。上の子供(Saidy)は大学生、下の子供(Helena)は高校2年生。旦那さんは若い時に亡くなられたそうで出身はムベヤというドドマの南西約600kmのところのため、近所には親戚やほかの家族もいません。私が家に行くといつも「Karibu (ようこそ)」と言って迎えてくれて、ウガリをごちそうしてくれます。そんな彼女は子供を学校に通わせるため、2つの病院で働いています。忙しいときには、病院で1週間連続夜勤、そして昼からはクリニックで働く。そんな毎日です。それでも毎日笑顔を決して絶やさず、一生懸命働き、子供たちを食べさせて、私のこともなにかと気にかけてくれます。とても優しく、愛に満ち溢れた人です。最後は泣きながら私を送り出してくれました。



Mama Wiliam & Wiliam



Leah & Saidy & Yashio & Helena

•Wilson

絵描きの Wilson は耳が聞こえません。そんな彼は手話と豊かな表情で私に話しかけてきます。13歳のころマラリアを患い、その後遺症で耳が聞こえなくなったとのことでした。タンザニアにはマラリアで耳が聞こえなくなった人が大勢いるようです。彼は絵を描いたり、アクセサリーを売ったりして生計を立てています。妻と子供（2才半）もいて、一家の大黒柱として休日返上で働いています。ちなみに「Karibu Tanzania 4号」の「今月の一枚」で紹介したのは彼の村です。

•Ms.Chacha



チャチャさん

以前紹介をしたことのあるチャチャさん。現在ムヒンビリ病院リハビリテーション部の部長をし、4人の子供がいます。チャチャさんが理学療法士になったのは、1976年。資格はドイツの学校で取ったとのこと。タンザニアに帰国後はリハビリテーション専門学校の先生をした後、ムヒンビリ病院に入職。その後1992年

に来日し、近森リハビリテーション病院で1年間の研修をされました。帰国前私が挨拶に行った際、日本の皆さんが温かく受け入れてくれたことがとても嬉しかった、いつか日本にもう一度行き、近森病院に挨拶に行きたいと言っておられました。

キリマンジャロ山

タンザニアには素晴らしい観光名所がたくさんあります。野生動物の王国が広がる国立公園、アラビアの街並みとコバルトブルーの海のザンジバル島などたくさんありますが、その中でも一際有名なものが、アフリカ大陸最高峰のキリマンジャロ山（標高：5895m）です。タンザニア滞在中に、このキリマンジャロ山に挑戦してきました。日程は6泊7日で、すべてテント泊です。1日目はハイキングのような感覚でタンザニア人ガイドとの会話も弾みます。2日目以降の景色は別世界でした。朝には雲海が広がり、高度が上がるとともにだんだん植物が減っていきます。3日目に4000mを超えたあたりから呼吸が苦しくなり、体が重く、足がなかなか前に進まなくなりました。標高が高いために、血中酸素濃度は90%以下になります。4日目は高度順応の日。3日目と同じキャンプ地に留まって、高度に身体を慣らします。5日目に到着したベースキャンプ（標高4700m）では高山病で、リタイアする人が大勢います。6日目のアタック当日は夜中の0時に登頂を開始。高山病の影響で頭痛がし、眠たくなり、急こう配の為、なかなか足が前に出ません。何度もあきらめそうになりながら、自分を奮い立たせて、歩くこと約8時間。ついにアフリカ大陸最高地点に到着しました。やっとたどり着いた山頂には氷河が広がり、視界を遮るものは何もありません。今までの苦しさを吹き飛ばす、感動的な景色が広がっていました。なんとも言えない達成感と高揚感は素晴らしいものでした。皆さんも Karibu Kilimanjaro !

ドドマ州立病院の今後の動向

2年間のボランティア活動を通して考えていたのは、「これから先に繋がる活動とは何か?」という事でした。いつかは終わりのくるボランティア活動ならば、それが終わったその先を見据えて行動する必要があると思っていたからです。しかし最初は思ったように仕事はできませんでした。とにかく言葉が理解できないし、タンザニアの医療状況や患者さんの状態などは分からないこと



いざ Kilimanjaro 山頂へ



登頂成功！

だらけでした。また医療マネジメントも不十分に感じることも多くありました。とにかく患者さんや同僚と話をすることを心がけ、確実に仕事をして、環境に慣れる努力をしました。徐々に自分のやるべきことが見えてくるとともに、問題点の改善に向けて取り組むことができ、患者さんの対応も少しずつ上手できるようになってきたと思います。そして最後には理学療法科内で良いチームワークができました。

形として残ったものは、受付システムや理学療法室の環境整備、リハビリ物品の作成、NGOとの関わり、スワヒリ語ラジオ体操など。そして見えないカタチとして残ったのは、3人の同僚たちが日本人と2年間働いた経験なのかもしれません。今後、ドドマ州立病院には3月から3代目の日本人理学療法士ボランティアが配属されることになっています。彼が、日本人と働いた経験を持つ理学療法士たちとチームを組むことで、更に今後に繋がるものを残してくれることを期待しています。そしていつの日か、日本人ボランティアや海外の支援がない状態で、タンザニアの医療が未来へと繋がっていく。そんな日がくることを願っています。

今月のスワヒリ語 ～相槌～

さて、今月のスワヒリ語。帰国後、人から「スワヒリ語出てこない?」と聞かれることがよくあります。普段は気を付けているのですが、ふとした瞬間出そうになることはよくあります。その一例を紹介します。皆さんは他県に行つて、方言を使うと伝わらなかった経験がないですか? 相槌一つにしても、他者に的確に思い

• Sawa? (サワ?) 理解しましたか?	• Haya (ハ〜ヤ) 了解!
• Nani ~ (ナニ〜) え〜つと……	• A, ah (あっあ……) 否定する場合
• E' e' e' e' ~ (え' え' え' え' ~) そうですか……	• Pole (ぽ〜れ) お気の毒に。お大事に。
• Asante (アサンテ) ありがとう	• Karibu (かりぶ) どういたしまして。ようこそ。

を伝えるのは、やはり現地の言葉なのだと思います。今後、私が変なことを口走っても温かい目で見守って下さいね。Sawa?

NINAFIKIRI HIVYO ～帰国して思うこと～

この2年間の経験を通して、自分自身の様々な感情や考えと向き合うことができました。たくさんの人々との出会い、日本とは違う文化・環境の中で働くことで、様々な物事を受け入れられるようになり、多角的にとらえようとする視点を持つことができたのは、本当に素晴らしい経験となりました。今後は近森会のチームの一員としての役割を十分に果たしていきたいと考えます。また自分の経験やタンザニアのことについて、少しでも多くの人に伝えたいと思います。2年間、このような貴重な経験をさせて頂きましたことを本当に感謝しております。ありがとうございました。

編集室通信

男41歳、本厄年!やっぱりきました。夜中から右下腹部の痛み、だけど下痢じゃない!って事でERへ行きましたら「虫垂炎」やね、と。そういう訳で皆さんが超忙しい中入院となりました。その後は無事に摘出してもらい、ここぞとばかりに本当の患者目線で入院生活を体験できたので、今後の建設に活かそうと思います。 奥田

2013年1月の診療数 システム管理室

近森会グループ

外来患者数	17,368 人
新入院患者数	786 人
退院患者数	708 人

近森病院

平均在院日数	16.18 日
地域医療支援病院紹介率	88.01 %
救急車搬入件数	373 件
うち入院件数	188 件
手術件数	387 件
うち手術室実施	268 件
→うち全身麻酔件数	153 件

● 平成 25 年 1 月度県外出張件数 ●
件数 42 件延べ人数 62 人

図書室便り (2013年1月受入分)

- ・神経伝導検査テキスト 筋電図 CD-ROM 付 / 栢森良二
- ・今さら聞けない IVUS / 森野禎浩(他著)
- ・格段にうまくいく EVT の基本とコツ: 症例でわかるデバイスの選択・操作とトラブルシューティング / 横井宏佳 (編集)
- ・確実に身につく心臓カテーテル検査の基本とコツ: 冠動脈造影所見 + シェーマで血管の走行と病変が読める! / 中川義久 (編集)
- ・改訂版 確実に身につく PCI の基本とコツ: 目で見てわかるデバイスの選択・基本手技と施行困難例へのテクニク / 南都伸介 (編集)
- ・動脈硬化性疾患予防ガイドライン 2012 年版 / 日本動脈硬化学会 (編集)
- ・新排泄ケアワークブック / 西村かおる
- ・手術術式の完全解説: 診療報酬点数表 2012-13 年版 1272 術式のポイントと適応疾患・使用材料 / 寺島裕夫 (監修)
- ・ガー・レイノルズ シンプルプレゼ

ン / ガーレイノルズ (著)、日経ビジネスアソシエ (編集)

《別冊・増刊号》

・別冊 医学のあゆみ 乳癌診療 Update - 最新診療コンセンサス 2012 / 戸井雅和 (編集)

・月刊 Medical technology 別冊 いま知りたい 臨床微生物検査実践ガイド - 珍しい細菌の同定・遺伝子検査・質量分析 - / 大楠清文

・臨床栄養別冊 NCM シリーズ Vol.4 栄養ケアマネジメントファーストトレーニング消化器癌 / 外村修一 (他編集)

・臨床精神医学 2012 年増刊号 精神療法マニュアル / 「臨床精神医学」編集委員会 (編集)

・Emergency Care 2013 年 新春増刊 救急・重症ケアに今すぐ生かせる みんなの危機理論 事例で学ぶ エビデンスに基づいた患者・家族ケア / 山勢博彰 (編著)